
不思議な関係

いおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な関係

【Zコード】

Z9547C

【作者名】

いおり

【あらすじ】

伊緒乃是、高生にある七不思議のひとつ“あかずの廁”をあけたことから、彼女の身体に宇宙人イオが居候することになった。ちょっとエッチで軽いが妙な正義感にあふれたイオに伊緒乃是ふりまわされっぱし。

第一話：へんてこな居候

「どこの学校にも大抵あるんですね、七不思議とか怪談話とか、そういう類の怖いお話が……。」

そして、我が校にあるんですねえ、そんのが……。

何でも夜遅くになると赤ん坊の泣き声が、なーんていうのでは
ないんですね。

“あかずの廁”早い話があかないトイレ。

いつからだかわからんだけぢ、もうずつとニアがひらかな
へんですつて。

一説によると、いじめを苦にした少女が、トイレの壁一面に彼女の血で恨みつらみをしたためて自殺したためだとか。

それ以来、何人も人がこのトイレをあけようと試みたらしきれど、無駄だつたんですつて。

そして、それが、今、目の前にあるんですね、いやですねえ、怖いですねえ、それでは、さよなら、さよなら、さよなら……。

「おーいー、行へやだよー。」

どすの利いたハスキー・ボイスが、薄暗くなつたトイレに響き渡

১০

「ちんたらちんたらしてねーで、わざわざなん!」

アフロヘアーに長いスカート、今時こんな時代遅れの不良がよくいたもんだ。

だが、彼女には彼女なりのポリシーがあるらしい。

わたしにはどうてい理解不可能だが。

そして、彼女の名前が“良子”不良が良子、まったく笑っちゃうよね。

「ねえ良ちゃん、伊緒乃ちゃんが可愛そひ、もひやめましょひよ

サラサラの長いストレートヘアを、ピンクのリボンで耳の上に左右に結んだ、お嬢様タイプの沙羅が、助け舟を出してくれた。

「なんでだよ、伊緒乃のやつが言い出したんだぜ、あかずの廁がほんとうにあかないのかなつて。それに、じやんけんに負けたのは伊緒乃だし……」

さすがの良も、沙羅相手だと口調が妙に優しくなる。

まったくもう、わたしに対する態度と全然違うんだから。

「はい、はい、わかりました! あけりやあいいんでしょ、あけりやあ

ふん、たかがトイレ! ときごびくつくわたしじゃないわよ。

足を踏ん張り、ノブを回して、力いっぱい引っ張った。

わあー！

予想に反して無抵抗にあいたドアに余りすぎた力が、わたしを床に叩き付けた。

いてつ、て、て、て……。

あれ？ 勢いで大きさに痛がつてしまつたが、どうしたわけかまったく痛みを感じない。

痛みがあるであらうお尻の辺りを触つてみたが、なんだか雲をつかむようで頼りない。

痛みどころか、触れた感触も無いのだから。

その上、目の前真っ暗、なんにも見えない、自分の身体もあるのだからどうかさえわからない。

今となつては、さつき触つたと思つたお尻も、本当にあつたのかも確信できない。

わたし、死んじやつたのかなあ？

えーっ、でもまだ、十六歳だよ、死ぬには早すぎりつて。

しかも、トイレのドアを思いつきり引っ張つて死んだなんて、みんなのいい笑いものだよ。

お父さんもお母さんも恥ずかしくって街なかを歩けなくなっちゃ
う、お兄さんだって学校へも行けなくなつて引きこもりなんかにな
っちゃつて、最後は家庭崩壊！

え～！ いつたいわたしはひすいの？

『クッ、クッ、クッ……』

暗黒の世界のどこからか、ぐぐもつた笑い声が響いてくる。

『だ、だれよー！』

なんだか不気味で、声を上げずにいたら氣絶しそうだった。

声といつても声ではない感じだし、死んでいるのだったら氣絶す
るつていつもおかしな氣がする。

『声じゃないよ。 きみたけの世界でいつのテレパシーみた
いなものかな？』

“へえ～、これがテレパシーなんだ”って感心してる場合じゃないや
ないで、だって今、心の中で思つただけのこと返事があつた
のだ。

それって、なに？ わたしの考へが簡抜けつこと。

『わうこわいと

ちよつと待つよ。

頭を整理しなくつちや。

えつとおー。

あつ、せうせう、初めて会つた人には、まずは血口紹介ね。

『わたしは浅田伊緒乃です』

『俺、イオ・グランデスカ・フォーレ・9844・ドレッチ』

『ん？ イオ、グラン、ナンデスカ、ドレス？』

『イオでいいよ。イオノとイオ、一文字違いなんて、なんだかきみとは運命を感じるね～』

『そんなもん感じなくつていい！』

『つれないなあ～、そんないけずいわんかていいやないの』

はあ？ なんなんだ、このへんなやつは。

もし、ここが死後の世界だとしたら、ここつが神様？ えー！
絶対ありえない！

だとすると、だれ？ 悪魔？ つて感じでもないか。

あつ！ ひょっとして、あかずの廻で自殺した少女の靈？

でも、声の感じ、いや、テレパシーの感じからすると男みたいだけど、最後の妙な京都弁は女のような気もしないでもないか。

いきなり、目の前に細長い光が現れたと思つたら人の姿を形成した。

身体のラインがくつきりとわかる、ダークブルーのウェットスーツのような服を着た人が立つている。

なにもない世界に立つてゐるというのも変かもしれないけれど、確かに見える、というのかわかるのだ。

なんて表現していいのか、もどかしい。

「幻影だよ。君の魂に直接映像を送つて見せてくる」

嘘つぽいほどバランスが良すぎる体型をした青年の口が動くと同時に声が伝わってきた。

あっ、あああ・あ～ん?

わたしはしばらく言葉を失つていた。

といつても、さつきからしゃべっちゃいないんだけれど、まあ、思考能力もしばらくフリーズしちゃつたつてどこかな?

『『そ、ういえ、イオ、だつけ? あんた自分のこと美化しすぎてるんじやないの?』』

太陽の日差しと見間違えそつたほどに明るい金髪が、肩を少し通り過ぎた辺りまで緩やかな螺旋を描いて伸びてゐる。

地球上のどんなに美しい海よりも透き通つた青い瞳。

「これはまさしく御伽噺から抜け出てきた王子様だ。

「地球人も、俺たちの美的感覚と同じか。まあ、もとを正せば同じ遺伝子だもんな」

王子様が揺らめきだと、今度は別の青年が現れた。

髪と瞳の色は、今、わたしの周囲にある漆黒の闇のようだ。

「うん、周囲の色と同じなのにわかるところの変だが浮き出しへて見えるってのかな？」

「ヒーリーが本当の俺」

さつ めの王子様が完璧だとしたら、イオは完璧にしようとしながら遊び心が抜けやつたかなって感じ。

「さつ めの王子様、捜しに地球まで来たってわけ」

『つてことは、さつきの美形キャラがこの世に存在するってわけ？でも、あんなイケメンがいたら、芸能界がほつとかないでしょ』

「肉体は惑星グラムにあるから、今は誰かの肉体を借りているだろうけど」

『肉体を借りるつて？』

「もともと肉体なんてただの入れ物にすぎない。だから、宇宙へ

出るとときは肉体と魂を切り離して、魂だけで宇宙旅行をする。肉体は現地調達すればいいしね。まあ、宇宙へ出る時は肉体への影響をいちいち考えるより、魂だけの方がよっぽど安全というものさ。肉体を捨てたおかげで、宇宙開発は飛躍的に進歩した。それで、こんな辺鄙な所にある太陽系にまで短時間でこられるようになつたんだ。まあ、理論上は宇宙の終わりまでいけるはずだけど、まだだれも行つたことはないけどね』

『ふうへんへ。でも、何でこんなところにいるのよ』

「仲間と一緒に王子様を追つて地球まで来たんだけど、ちょっとしたトラブルがあつて、緊急避難的にこの空間に潜り込んだんだ」

『潜り込んだって、ソリューション。それに仲間はビビついたのよ?』

「たぶん……」

一瞬、長い金髪に透き通るような白い肌の女性が目の前に現れて消えた。

なぜか胸が締めつけられるように苦しくなつた。

「あいつ、必ず生きているよ、この近へで」

まるで、彼は自分で自分に言ひ聞かせるように呟いた。

「王子様とお姫様は、必ずハッピーハンドで終わらなくっちゃいけないんだが、この星の御伽噺では」

彼はちよつぴつ苦笑いをする。

「田馬の王子様を思い出しながらも、時折いたずら王子のような表情を見せる田の前の彼から、なぜか田を放すことが出来ずについた。

わたしはいつも方が好みかな。

「サンキュー」

「ゲツ！ あいつ、わたしの心を読めるんだつたつけ。

それつて、すうじくまずいじやん。

イオはわたしの思いを完全に無視して話を始めた。

「仲間をみつけるために、一刻も早く肉体に入らなくてはならない。魂だけでは、さすがの俺も身動きがとれないからね」

『肉体つて、まさか

「やつ、きみの」

『ちよつとまつて！ そんなの困る。よし、あたつてくんない』

「俺つて特異体質だから、だれでもいいつてわけじゃないんだ。今まで待つて、きみしかいなかつたのだから……」

いつの間にか、彼の美しい顔が田の前に迫っていた。なんだか、心臓がドキドキする。

「これ以上、選り好みしている時間がないんだ

『選り好みつて何よ！　わたしの身体になんか文句あるわけ！』

「いや、もうこのやうなじつはないわい」

『じゅ、なによー』

「ああ、めんじくせー。もう、勝手に入るよ。わみせー！」でもつって」

『ちょっと、こんな所にわたし一人置いてくき。まつてるあいだに、気狂っちゃうよ』

۱۹۷۴

『まへ、まつて、まつてつたひー、ひあー。』

急に抱きかかえられたように、ふわりと身体が宙に浮いたような感じがして意識が遠のいた。

消毒の匂いが鼻をついた。

この匂いは…………保健室？

意識が戻ったとき、恐る恐るわたしは目を開けた。

田の前にあつたのは、沙羅と良の心配顔だった。

沙羅は今にも泣き出しそうな顔をしてくる。

良と田が合つたと、彼女は慌て顔をそむけた。

「よかつた」

大きな眼に涙を溜めた沙羅が、わたしに抱きついた。

「死んじやうのかと思つたんだもん」

お、重い。

今までのふわふわとつかみどりの無い感覚の世界から、いきなり自分と沙羅の体重を感じたものだからまるで天井に押し潰されたよつに重い。

「ぐ、ぐるじーい、本当に死んじやう」

「あつ、じめんなさいー。」

沙羅が飛びのく。

わたしあやつくりと身体を起こした。

「痛いー。」

トイレでお尻を思つてしまふつけたのを思つ出した。

あれって、夢だったんだ。

ほつとしたような、なんだかちょっとびり淋しそうな気がした。

だって、普通、宇宙人なんかに出会うなんてありえないでしょ、
その上、その宇宙人がたこ型でもグレイでもなくって美形だなんて
絶対ないもんね。

少し残念かな？

『残念がつてくれるの？ うれしいなあ～』

「ぐえー。」

突然の声、いや、テレパシーに驚いて奇声を発してしまった。

「どうしたの？ 伊緒乃ちゃん？」

「なんでもない」

わたしは一人に聞こえないように細心の注意を払って、口に手を
やり小声であいつに言つた。

「どうしているのよ」

『声なんか出さなくても聞こえるよ』

まだわたし、夢の中にいるんだ。夢よ、覚めろ、覚めろ、覚め
ろー。

『夢なんかじゃないよ。俺はきみの身体の中にいる』

身体の中にいるって言われても……。

『いいのいいの』

わたしの手が、勝手に動くと自分の胸を触った。

「わあーー。」

わたしは大声を上げた。

それと同時に、良の切れ長の眼と、もともと大きな沙羅の眼が、飛び出さんがほどに見開かれたと思つたら、次の瞬間眉間にしわを寄せた細い目になつた。

その間もわたしの手が、勝手に自分の胸をもみもみしていく。

「いらー やめるー。」

わたしの声に反応して、手はピタッと止まつた。

沙羅の眼に再び涙がにじんできた。

「かわいそう、伊緒乃ちゃん。頭打つておかしくなつちやつたの。でも大丈夫、心配しないで、伊緒乃ちゃんが変態になつてもわしたちお友だちだもんね」

沙羅がわたしの手をそつと両手で包む。

「ほひ、良ちやんも」

「あたいは一匹狼だ、こんなやつ、だちなんかじやねえ！」

一匹狼、これが良の口癖だ。

そのくせ沙羅と幼稚園来の幼馴染だとこいつのだ。

ここの、どう見ても不釣合いな一人の仲がいいところは、七不思議の一つかもしれない。

「そんなこといわないの」

沙羅は良の手を引つ張つてわたしの手に重ねた。

そっぽを向いている不良の良と、お人形さんみたいに可愛い沙羅、そして「ぐぐく普通の（こや、ちょっと地味かな？）高校生のわたし、傍田にはどう映るのだ？」

普通の友達じゃないよね。

それから、わたしとイオと名乗るエイリアンの関係は、なんていえばいいんだろ？

家主と店子、大家と居候？

まあ、こずれにしてもこんな話、だれもまともに取り合ってはくれないだろう。

第一話・へんてこな居候（後書き）

初めての投稿です。じく緊張しています。
書いては直し、書いては直しなかなかはがどりませんが、なんとか
最後までがんばります。
みなさまの「」感想が聞けたら光栄です。

第一話・はた迷惑なあいつ 1

あいつ、イオに出会ってから一週間、最悪の日々が続いた。

生傷や痣が絶えないのである。

ズル、ガラガラ、ドテ！

「いってえーー！」

ふう、またやつてしまつた。

『バーカ！ 風呂場で眼つむるやつがいるかよ』

『だれもやりたくつてやつてるわけじゃないわよ！ いつたいだれのせいだと思つてるのよ。あんたのせいよ、あんたの！ まったく、イオのせいで傷だらけよ。この白くて美しい肌に跡でも残つたら、どう責任とつてくれるのよ』

家の脱衣場とお風呂場には、父親の悪趣味でバカでかい鏡がある。

鏡の前で筋肉おじの父がポーズをとつて、鍛え上げた身体に惚れ惚れしている姿など想像するだけでぞつとする。

そして、この鏡があるばっかりに、わたしは服の脱ぎ着も風呂に入る時も田を閉じていなくてはならないのだ。

あいつに見られないために。

なんたつて、わたしの見ている景色は、あいつに丸見えなのだから。

『誰もわざわざ寸胴なおまえの裸なんか見るかよ。ひょうたん見てるほうがよっぽど感じるぜ』

『な、なんですって！ 見たことも無いくせに…』

「あーっ！」

痛いお尻をなでながら立ち上がった拍子に目を開けてしまったその先には、無駄に大きく少しの曇りもない鏡があった。

驚きのあまり、数秒間目を閉じるまで時間がかかってしまった。

『見たなあ』

『さつさんの言葉は訂正するよ。寸胴ではなくつて洋ナシだ』

『はあ？』

『胸がないのに腹が出ている』

『失礼なー！』

いちいち頭に来るやつだ。

人の裸をただで見ていいながら嫌味を言つ。

反論できないところがますます気に入らない。

そう、このお風呂が怪我の絶えない理由の一つであった。

そして、一つの理由があんちきじょうの妙な正義感だ。

わたしは今まで“めんどうな事はしない”“人とは深くかかわらない”“熱くならない”この三つをモットーに生きてきた。

それが、世の中を上手く渡つてこくコツだと黙つていたから。

なのに、なのにだ、高校に入つて沙羅に出会いからとこつもの、この三つのモットーを破ることが多くなつた。

だいたい、このモットーを破つてからなことがあつたためしがない。

あの時だつて、あんなに熱くなつてトイレのドアをあけさえしなければ、イオなんていう変な宇宙人を自分の身体に居候させなくても済んだのだ。

そうすれば、あいつの正義感のために絶えまない筋肉痛や生傷にさいなまれなくつてもよかつたわけで。

だいたい、なんでポイ捨てをする人や女性に絡む酔っ払い達を注意するたびに、いちいち喧嘩になるんだかまったくわけがわからなさい。

そう、イオが来てからとこつもの、くくなつがないのである。

明日はじつか平穏無事に過ごせますよつ。

第一話・はた迷惑なあいつ 2（前書き）

改訂といいましても、抜けていた文字を一文字足しただけです。

第一話・はた迷惑なあいつ 2

教室の隅に置かれたゴミ箱は、いつものようにテトラパックや紙くずでいっぱいになり、その周辺には投げつけられたようごみが散乱している。

わたしは、もうこれ以上入らなくなつたゴミ箱を、一度空にしてから掃除を始めた。

掃除当番は、班ごとに交代でいろいろなところが回つてくれる。

でも、ほとんどの生徒は当番などやらない。

わたしの班もわたし以外誰一人として掃除をしない。

「なに掃除なんかやつてるの」

机に座つたまま仲間とおしゃべりをしていたクラスメイトが、そばを掃いていたわたしに声をかける。

「じゃ、だれがやるのよ」

不愉快な気分になつた。

『へー、以外、伊緒乃ちゃんはめんどくなことはしない主義じゃないの?』

イオのやつが人の神経を逆なでする。

「うねやーー」

わたしの大声にクラス中が静まり返った。

わたしは背中を曲げて、ほつきを掃いていた姿勢をせりこへりへしてごみを掃き続けた。

『決まり』とはきちんと果たす、それが嫌だつたら規則を改正するぐらいのことをやんなきや。 それもせず、守んないのは嫌いなの。それに、人の変なかかわりをもたないためにも規則は守つた方がいい』

『それなら、みんなにも守つてもらつた方がいいと思つけど』

『そりやそりだけど、そんなの無理だよ』

『やうかな、あの良でさえ掃除にこつているだら』

『まあね。ただあれば、わたしのまねをしている沙羅さらに付き合つているだけだし』

やう心の中でイオと会話しながらも、良が引きずるようなストラトをたくし上げてトイレ掃除をしてくる姿を思い浮かべると、思わず吹き出しちゃった。

わたしの口を勢いよく飛び出したつばが、目の前のながーく伸びたズボンにくつこった。

恐る恐る顔を上げるとほるか上空に無表情な顔があつた。

「「」、「」めんなさい」

百九十センチ、格闘家ぱりに体格のいい男子が立っていた。彼は鞄を持つとなにも無かつたように教室を出て行こうとする。

「ちよつと待てよ」

イオの声に彼が止まる。

「掃除当番だる」

『なにじつてんのよ、イオ!』

「掃除しろよ」

『イオ、大友くんを挑発しないでよ』

わたしは慌ててイオを止めに入った、無論、心の中でだ。

大友くんはやぐざの組のナンバーワンを父親に持つと噂されている。

先生さえ彼には、なにも注意をしない。

といふか、取り立てて悪いことをするわけでもないから、彼を注意する理由もないのだけれど。

クラスメイトはやぐざの息子という以前に、彼のいかつい姿勢やどこか人を寄せ付けない雰囲気から、だれ一人としてかかわりをもとうとはしない。

その彼にイオは意見しているのである。教室中の生徒がわたしたちの様子に無関心を装いながら聞き耳を立てている。

「はい、箒と塵取り」

イオは、わたしがもつていた掃除道具を渡そうと彼の目の前に差し出した。

見下ろしている大友くんの顔を下からまじまじと見上げた。

大きくも無く小さくも無いほどよい大きさの眼、てこりな高さの整った鼻、少し大きめのふつくりとした口。

彼つて、こんな顔してたんだ。

近寄りがたいイメージとは少し違つた顔だった。

普通に見れば、イケてるぶるいかもしけない。

意外と人の顔なんてよく見ていないものだな。

彼は目を瞬たせると、わたしに背を向けて歩き出そうとした。

立ち去ろうとしている大友くんの後姿を見ながら、ほつとしたのも束の間。

「聞こえないのかよ」

挑発するようなイオの声。

それでも、無視をして行こうとする彼の腕をイオはつかんだ。

「もう掃き終ったからさ、これ片付けてくれるぐらいいいんじゃないの？」

イオは彼の手に籌と塵取りを持たせると、ごみ箱のごみを捨てに教室を出た。

わたしが教室に戻ったときには、大友くんも箒や塵取りも消えていた。

「伊緒乃ちゃん、大友くんに塵取りを片付けさせちゃつたんだって、すつごーい！ 見てみたかつたな、大友くんが塵取り抱えているところ」

後方より甘つたるい声がする。

「ねえ、ん、一緒に帰ろう、うふ」

わたしの背中に沙羅が抱きついてくる。

「ごめん、先に帰つてくれる？」

「えへ、また一緒に帰らないの？」
「え、さうですか？」
「えへ、まだ一緒に帰らないの？」
「えへ、まだ一緒に帰らないの？」

どういうわけか入学してすぐに沙羅とは友達になつた、というよ

りも沙羅になつかれたという方が正しいかもしない。

いつもならこんなときは振りほどくところなのだが、今日は違う。今はあいつ、イオがわたしの身体を動かしているのだ。

きつと沙羅の水^ミヨー^ヨのよつに軟らかい胸の感触を背中に感じて、おもにつきり鼻の下を伸ばしているに違いない。

イオは妙に人間臭い、わたしの思い描いていた宇宙人のイメージとはほど遠い。

「こつまでせうじるきだ、は・な・れ・るーつ！」

平均身長のわたしとちゅうと背の低い沙羅を、背の高い良が引き離した。

「それじゃあ、バーイ！」

そういひとイオは駆け出した、もちろんわたしの身体、でも今はあいつが支配している。

イオの行き先はわかっている、体育館だ。

お田辺では体育館の片隅で練習している剣道部。

女子一姫と男子四姫の淋しい部だ。

古くからある部とこいつことで、同好会への格下げをからうじて免

れている。

これ以上部員が減つたら、来年あたりは同好会になつていいかも
しない。

まあ、そんな他人の部の内情はどうでもいいのだが、肝心なのは
イオがこの部にえらく執着しているという事実だ。

最初は剣道という日本古来の武道が、物珍しくて見てはいるだけだ
と思っていた。

だがしばらくして、イオが見ているのは特定一男子部員だと気が
ついた。

わたしより一つ上の二年生、広瀬祐樹。
ひろせ ゆうき

先輩を見ているとなんだか切ないような苦しくなるような、心臓
がスキップするような変な
感覚になる。

先輩とは話したこともないのに。

これはたぶん、イオの感情と同調しているだけなのだろう。

広瀬先輩は、体育館にたつた一人になると雑巾掛けを始める。

これが日課だ。

今日は、イオも彼に習つて雑巾掛けを始めた。

イオつたら、なにを考えているんだか。

ほんの一瞬、先輩はわたしを見たがなにじとも無かつたように雑巾がけを続ける。

体育館にふたりつきり。

イオは雑巾がけを一往復しただけでわたしにバトンタッチした。だだつ広い床の真ん中に、水で輝くラインを一本引いただけで、わたしはリタイヤしたい気分だった。

『かわつてよ』

くつそー！ 無視して！

先輩はもうかなり拭き終わっている。

休んでいるわけにもいかず、再び重たいお尻をあげた。

田頃の運動不足がたたる。

『あけんじやねえ！ やつてられつかんな』とー。』

疲れが腦にまでやつてきて、言葉遣い、いや、考える言葉が乱暴になつてくる。

やつと、過酷な筋トレ？ が終わり体育館すぐ横の流しに先輩と並んで雑巾を洗つた。

雑巾を洗い終ると、先輩は手をだした。

その意味がわからず、わたしはただ突っ立っていた。

「雑巾」

さわやかなミントの香りが漂つてくるみたいな声。

わたしに代わってイオが雑巾を渡した。

「今日はどうもありがとう」

まじかで先輩を見たのは初めてだし、こんなに優しい声を聞くのも。

いつもは、離れた所から眺めているだけで、つい、つい、そうじやない、イオはテレパシーを送つていていたみたいだったけど。

「」の頃、毎日練習を見に来ているけど、剣道好きなの？」

きりりと引かれた目元が、なんだかぞくつとしきやつ。

「いいえ、べつに

イオのそつけない返事。

少し傾げた先輩の髪から滴り落ちそうな汗のしづくが、夕日色に染まつて見えた。

わたしたちの影が長く伸びていけばかりで言葉が続かない。

なにかいわなくつちやと、わたしは乾ききった唇をひらいた。

「あの、なぜ、先輩はいつも一人で掃除をしているのですか？ 他の部つてみんな後輩にやらせるのでしょうか？」

「使つた場所に對して感謝をこめて、つてこうとかつこいにけど、自分のため、かな？ 最初と最後には雑巾掛けをしないとなんか落ち着かなくつてさ」

照れ笑いをする。

稽古をしている時の凛々しさとは違つて、なんか可愛い。

「明日、きみも練習に出てみない？」

「とんでもない、わたし運動音痴ですか？」

「やつてみると楽しそよ。それに、俺も……仲間が多くほつが楽しいし」

「遠慮しておきます。見てるだけで十分楽しいですから」

「やつ」

先輩がじつちを見ている。

まだ、胸が締め付けられるように痛くて、呼吸が出来ないくらい苦しい。

「じゃあ、今泣きてるで」

そのひといとがやいとで、鼻孔ここのもほれてわたしまで顎け出し
ていた。

朝、教室に入るといつも以上に騒がしかつた。

特に女子たちがざわついている。

「ねえ、聞いた」

「新しい担任、今日からでしょ？」

「イケメンだつて！」

そんな話し声が、あちらこちらから聞こえてくる。

チャイムが鳴ると、みんな慌てて席についた。

そして、前のドアがひらくとスーツを着た男性が入ってきた。

みんなが浮き足立つていたのも頷ける。

中央まで来ると黒板に九条龍之介と書いた。

「今日から山川先生に代わつて、きみたちの担任になりました“くじゅう、りゅうのすけ”です。よろしく」

九条と名乗る男性が教壇に立つてこちらに振り向いたとき、どうかで会つたそんな気がした。

教室中が静まり返っている。

すべてのクラスメートが、九条先生のあまりに浮世離れして整いすぎた姿かたちに目を奪わたからだ。

どこかで。

こんな美形を忘れるはずはないのに、思い出せない。

先生と眼があった瞬間、ほんの一瞬だつたが先生が眉間に皺を寄せたように見えた。

『そうだ、あのときの人に似ていると思わない?』

わたしはわたしの中のイオに問い合わせた。

そう、イオに初めて会つたとき、イオは九条先生に似た人の映像をわたしに見せた。

あの美しい男性はブルーの瞳に金髪だつた。九条先生は黒髪に黒い瞳、どう見ても日本人だけど、確かに似ている。

『ねえ、イオ』

イオはなにも返事をしない。

「……のちゃん、ねえつたら」

前の席の沙羅が振り向いて、わたしの机の上に両肘をつき手のひ

りの上に頭をちょいと乗せてわたしを見ていた。

いつの間にか朝のホームルームも終わり、新しい先生はいなくなつていた。

「あつ

「ほへつとしちやつて、どうしたの？」伊緒乃ちゃんも先生に見とれちゃつてたの？

「ち、ちがうつて」

「伊緒乃ちゃんたら気多いんだから。
るんだから浮気しちゃダメでしょ」

沙羅はぱつくりとした赤ちゃんのよついた手で、包み込むよついたしの手を握り締めた。

その手を引き離す大きな手があつた。

「良ちゃんとたら邪魔しないで」

「伊緒乃には剣道部がいる。その上、新しい教師にまでうつつを抜かすような浮氣者は、沙羅に手を出す資格はない！」

「剣道部つて、広瀬先輩？ 先輩も先生も関係ないと思つけど。それに、沙羅に手をだすなんて気、さらさら無いから」

「沙羅、てえ、だして欲しい！」

「伊緒乃は剣道部のことが好きなんだ」

一の句が継げなかつた。

考えてもみなかつたからだ。

第三話・賭けられたファースト・キス 1（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

一応、全体の1／3程度までやつてきました。
書きあがつてはいても、ああしたほうがいいかなこつしたほうがいいかなと悩んでばかりです。

ほかの小説たちも書きあがつては直してしまい、とつとめもなくなつてしまします。
こんな私の相談にのつてくれるという、奇特な方がいらしたらうれしください。

第三話・賭けられたファースト・キス 2

たしかに傍から見れば、わたしが広瀬先輩に気があるよつに取れる。

毎日毎日剣道部の稽古に通いつめて、普通だつたらうつ思つよね。でも、通つていたのはイオなのだ。

そして、イオが見つめていたのは広瀬先輩。

そういうえば、先輩を見ているとわたしの心臓は全力疾走したあとみたいだ。

ひょつとしてあれが恋のときめきつてこつやつ? - .

あ、あれはイオの心に同調しているだけで。

じゃあ、あいつが先輩に恋しちやつてるの?

まさかあ、あいつは男だし、先輩も男。

もしかしたらイオは女?

イオはエイリアンだから地球の常識は当てはまらないのかもれない。

いや、エイリアン自体に男と女の区別があるかどうかも分からない。

えへっ、どうなってるの？

わたしの頭の中を止めどもない疑問が猛スピードで駆け巡っていくなか、良の声が聞こえてきた。

「で、剣道部とはどうなってるんだ？ 告白したのか？」

「えへっ、沙羅、そんなの許さない！ 伊緒乃ちゃんが、男の人と手つないだりキスしたり、あんなことしたりこんなことしたり、なんて絶対いやだもん！！」

「なんでもうこう話になるのー。」

慌てて一人の会話を断ち切り、

放つておいたら、一人の妄想はますますエスカレートするに違いない。

「まあ、あたしとしかや、剣道部と伊緒乃が上手くいってくれた方がいいんだけど。でも、まあ、無理だね。こんな、色氣もなにも無い女に、男が寄つてくるわけがないって」

「そつか、沙羅あんしん」

「伊緒乃には初体験ビックリが、ファースト・キスさえ千年経つても無理つてとこか」

なんで良は、こんな内容の会話でも事務的にしゃべるんだ！

「わ～、よかつた。あ、でも～、千年経つてキスしちゃつたら、沙羅、いや～ん！」

「ちょっと待つた。それじゃあ、わたしのがちつとももてないみたいじゃないの」

「違う？」

良がわらつとかわした。

「なによ、男の一人や二人、キスのひとつやふたつ」

「ひとつやふたつねえ～

良の人を馬鹿にしたような物言ひが、わたしの神経を逆なでする。

「じゃあ、賭けない？」

「望むところだ！」

勢いに任せて賭けに応じてしまつてから後悔した。

これつて、いつものパターンにはまつているみたい。

“あかずの廻”のときと同じだ。

そう、あの時点で、もつと冷静になつていたら、今みたいな最悪の事態にいたらなかつたはずだ。妙な宇宙人がわたしの身体に居候するなんて、非現実的な

状況に。

そんなわたしの思いをよそに、良は勝手に話を進める。

「一週間以内に伊緒乃が剣道部とキスをする」

「えーっ！」

「そんなのダメ！ 沙羅が許さないもん！」

「どうせできつこないんだから、沙羅は心配しなくつたつて大丈夫だ」

「あつ、そつか」

沙羅のやつ、簡単に納得するなっていうんだ。

なんか、当たっているだけに虚しいじゃないか。

一週間後には、沙羅の大好きなシャンホ莓ババガ仑へとれるそ

「やつたあ！ どうせ、伊緒乃ちゃんにキスなんて出来るはずないものね。先輩つてもてるのに誰とも付き合わないんでしょ。 だったら伊緒乃ちゃんを好きになる、なうんてありえないもんね」

「ただ、」の感覚にせよ、夢食の由ゆゑかわざわざ、二つひとわざわざ

「なにそれ」

「もう、一人してわたしの」とばかにして。やりやあいいんでしょ。やつてやつりやん、キスだろつが接吻だろつが！」

「あの、お取り込み中、大変申し訳ございませんが、そろそろ授業を始めてもよろしいでしょうか？」

いつの間にか古文の中森先生が田の前に立っていた。

クラス中が嘲笑の渦に巻き込まれた。

わたしはまるで南極の氷の海に飛び込んだ気分だった。

ペンギンになりたい。

『バーク』

イオの言葉がわたしの身体の中に空しく響き渡った。

第三話・賭けられたファースト・キス 3

我が校のトイレは、東階段の横が男子専用なら西階段横は女子専用といつ具合になつてゐるんです。

せりによくなつて、階「」とに男女が逆だなんて。

だいたい、校舎なんてコンクリートの四角い入れ物、どの階もまったく同じ造りなんだから始末におえない。

まさに、今日は、悪条件が重なつた。

一つ、家庭科の授業で、自分のクラスの真上にある家庭科室に来ていたということ。

一つ、家庭科室にいたのを忘れて、始業チャイムの鳴る間際に慌ててトイレに行つたこと。

よつて、自分の教室にいると勘違ひしたわたしは、駆け下りる必要もなかつた階段を大急ぎで駆け下り、思い切りドアを開けてしまつたのです。

開いたドアの向こうに広がる男子用の便器の列。

人影。

急いでこの場を立ち去ろうとしたけど、時すでにおそじドアは閉じられていた。

「浅田さん」

聞き覚えのある声の方に視線を向けると、それは広瀬先輩だった。

「あっ、すみません！ あの、何も見てませんから」

なにいつてるんだ、わたしつたひ。

思い起しがば三ヶ月前、入学式にも同じドジをした。

あの頃は右も左もわからない校舎で、男女一緒にのかと思つたのだ。

「一度田だね、トイレで会ひの」

「えつ？」

あの時いたのも先輩だったの？！

「う、うそー！ ありえないー！」

「浅田さんて男だったの？」

「いえ、あの、そのー」

なんとかえしたらよいのかわからないセリフに困惑した。

その上、沙羅と良の賭けを思い出しつゝ、ますます顔が火照つてくれる。

「あははは、冗談だよ、冗談」「

「先輩でも冗談いうんですか？」

「俺だつて冗談くらいいいつで。食事もすればトイレにもこくし、寝たりもある。アイドルじゃないからね」

「えーーー！ 寝るつて女人と」

いつてしまつてから後悔した。

居候のイオが来てから、あいつの変態的思考がわたしにつついてきたみたいだ。

ただでさえ、穴があつたら入りたいつて心境なのに。

こんなことなら、イオとであつたトイレの空間に残つてたまつがよかつた。

「す、すみません！ 失礼します」

頭を深く下げるトイレを飛び出した。

おんぼろ自動車で「ほ」道を走つてゐるかのよひに、身体中が小刻みに揺れ続けていた。

よつて、そのあとの家庭科の授業など、まともに受けられるはずもなかつた。

九条先生が剣道部の顧問になつてからといつもの、部活時の見学者が急増した。

やつぱり、なんやかんやいつても人は見かけに弱い。

なんてつたつて、九条先生の姿に関しては、非の打ち所がないのだから。

その上、達者な口の御蔭で女子だけではなく男子にも人気がある。とはいっても、さすがに部活まで押しかけてくる男子はいんだけど。

わたしは、女生徒たち（あつ、女教師もちらほら混じつて）に、占領された体育館のドアから少し離れた位置にいた。

だつて、ああこつ輪の中に入つていいくには、すこし抵抗があるもんね。

それに、こつやつて彼女たちの後ろから様子を見ていると、だれがだれのファンだか手に取るようになかる。

なんかおもしろい。

今まで見かけなかつた広瀬先輩のファンも、九条先生のファンに紛れて見学に現れるようになつていた。

沙羅がいつていたように先輩のファンも意外に多い。

以前は先輩が嫌がるから見学者がいなかつただけのようだ。

先生の洋酒の入つたスイーツみたいにとろけそうな大人の甘い雰囲気とは対照的に、なんといつても先輩の胴着姿は凜然としてかっこいいもんね。日本男児つて感じ。

それにしても、九条先生が現れてからといつもの、イオはなんだかおかしい。

『俺はおかしくねえ!』

『うういうところが、あいつはガキだ。』

自分の感情を認めようとしない。

そういえば、いつたといいくつなんだ、イオのやつ。

『十九、おまえより年上だ、少しほ年長者を敬うつて気持ちがないのか地球人には』

『なによ、イオの歳なんて今はじめて知つたんじゃない』

『伊緒乃が訊かなかつたからだ』

そんなのへりくつじやない。まつたく、そういうところがガキだつていうのよ。

『うるさい!』

それにしても納得がいかない。

なぜわたしの考えはイオに筒抜けなのに、イオの考えはわたしにはわからないのかって。

あいつがわたしに云えようとしたときだけ、言葉としてわかると、いうのは凄く不公平だと思う。

だつて、わたしはこの身体の正当な持ち主なのだ。

なのに居候であるあいつの方が主導権を持っているといつのは絶対におかしい。

といつても、あいつの感情だけは時々固いガードを破つて漏れてくる。

いらだつているとか、不機嫌だとか、そんな雰囲気が伝わっていくだけだけど。

とくに九条先生と広瀬先輩に対するとき。

『ねえ、イオ。九条先生ってイオの探している人でしょ?』

以前答えてもらえたかった問いをイオにかけた。

『初めてイオに会ったとき、見てくれた王子様が九条先生なんですよ』

『ああ』

『でも、本人の身体じゃないんだよね』

『ああ』

『だつたら、なぜ王子様と同じような顔をしているの?』

『思うように変えられるの?』

『イオの星の人は思うだけで肉体まで変えられちゃうの?』

『ある程度は、人間だって、性格が顔に出るつていうだろ』

『まあね。でも、それって多少変わる程度で別人にはなれないもの。選んだ地球人が元々似ていたつていうのならわかるけど、そんなのつてありそうにないし。それに本人びっくりしちゃうよね、自分の顔が急に変わっちゃつたりしたら。あつ、その前に変な宇宙人が入つてきちゃつたほうが驚くか』

イオは黙り込んでいる。

こんなとき、相手の顔が見えないつていうのはよけい気まずい。

相手の表情からつかがい知ることができないのだから。

『乗つ取つたんだ』

『乗つ取るつて、乗り物じゃないんだよ。心のある人間だよ』

『もとの持ち主の魂を追い出したつてこと。つまり』

あの言葉を待つたが、続かなかつた。

『そりだ、イオがわたしをトイレに置き去りにしようとしたのと同じことをしたんだ』

『たぶんやうじやない、あいつのことだから』

なんだか怖くつて、それ以上聞くことも出来なかつた。

まるで、自分の未来を聞いてしまつようだ。

地球人の常識なんて彼らには通じない。

どんな卑劣な手を使つかわからない。

いや、地球人のほうが、もつと悪いことをしているのがもしかれないけど。

第四話・二角関係！？ 1（後書き）

アクセス数に一喜一憂しながら、それを励みに書いています。
これからもよろしくお願いします。

誰もいなくなつた教室に戻つて、しばらくなにも考えずについた。なにか考えたりしたら、自分のいまの立場がすぐあやふやで不安で怖くつて。

廊下から、はしゃぐ男子の声とともに走り回る足音やボールのはずむ音が近づいてくる。

『ねえ、イオ、探していた人が見つかったのになぜ話し掛けないの。これからどうするの』

『ああ』

『あつて』

『まずレナの記憶が戻つてからかな』

『レナつて一緒に来たつていう仲間？』

『ああ』

『記憶がないつて……どの人がレナかわかつてゐつて』

ガラスの割れる音が響いた。

緩慢な動作でイスから立ち上ると廊下へ出た。

そこには、遠く階段を駆け下りる靴音だけを残して、すでにだれもいなかつた。

床には割れた窓ガラスが散ばっている。

ほつきで掃き集めたガラスを、けぎつたマンガ本の上に乗せた。

窓枠に残っていたかけらを取ると指先に痛みが走った。

わたしもそのうち、地球人の九条先生みたいに乗っ取られちゃうのかな？

今も乗っ取られているのとあんまり変わらない気がするけど、イオがいいよどんだつてことは、本当の九条先生はもうこの世には……。

いない。

人差し指にすっと伸びた切り傷が、血で赤い線に変わった。

なんだか、この赤い血が、まだ自分が人間であることの証であるような気がした。

ティッシュで傷口を押えると保健室へ向かった。

保健室のドアの窓からは明かりが漏れている。

窓越しに、九条先生と肩に包帯を巻いた上半身裸の男子の後姿が見える。

先生は男子の座っていたイスの背もたれに手を掛けると、彼の額にかかる髪をかき上げる。

中に入つて絆創膏をもらうだけなのに、なぜかそれができない。なんだか、見てはいけないシーンを見てしまったような気がしたから。

あの後姿は、広瀬先輩だ。

『レナ』

今のは先生のテレパシー、話してはいない。

『私を捜しに来てくれたのでしょ、レナ』

先生の手が先輩の頬に触れる。

『レナ』

「レナ？」

広瀬先輩の唇がかすかに動く。

『そう、あなたの名前。そして、私はアール』

「アール」

イオがいるせいか、人の考えが時々わかつてしまう。

まして、テレパシーならなんの障害もなく聞こえてくる。

『レナは私の恋人』

いつの間にか力をこめて握っていた傷口が、ドクドクと早く波打ち始めたのを感じた。

気づくと、わたしは家に向かつて歩いていた。

小さな公園にさしかかると、騒ぎ声が聞こえてくる。

薄暗くなり始めた公園内にある切れかかつた街灯の下で、制服を着た三人の男子高校生が、タバコを吸いながらふざけあつてゐる。

今までのわたしなら、見て見ぬふりを決め込んでいた。

それが今の日本にあつては最善の方法なのだから。

でも、最近は違つ。

イオがわたしの身体を占領しているからだ。

あいつには妙な正義感がある。

その上、今は虫の居所が悪い。

なにやら、イオとレナとアールの三人の間には複雑な事情がありそうだ。

わたしはといえば、広瀬先輩と九条先生のあんなシーンを見てしまったショックから立ち直れないでいる。

なんでわたしがこんなに落ち込まなくてはいけないのだ。

先輩とわたしは、なんの関係もないのだから。

それに、あれは、先輩ではなく、身体を支配していたのはきっとレナだったのだから。

足元に吸殻の散乱している不良たちの側まで来ると、イオがどすの利いた声をあげた。

「拾えよ！」

まあ、普通の女子高生のわたしがしゃべるのだからたかが知れている。

しゃがみ込んでいた不良が、微妙に時間をずらして立ち上がった。

一人がタバコをくわえたままわたしの前に来ると、それを吐き捨てた。

「肺ガンでおまえらが早死にするのは勝手だが、地球を汚すのは許せねえ！」

いつものイオの決め台詞である。

大抵ここで一瞬相手は引くのである。

そして、ほとんどの人間が同じようなセリフを吐く。

「けつ！ 気狂いかよ。 邪魔だからさつさと帰れ！」

「そこに散らかっている吸殻を片付けてくれたら、帰るよ」

不良たちは、イオの言葉を無視してなおもタバコを吸い続ける。

「片付けるよ」

「うるせえな！」

不良の一人がイオの胸を小突いた。

「手を出したな。だつたら、こいつもいかせてもらひやせ」

言葉と一緒にイオの左手のパンチが不良の腹に入る。

彼は息も出来ずにその場にかがみ込んだ。

別の一人がいきなり繰り出した拳を、イオは寸前のところで避ける。

その後、続けざまに飛び出してくる鉄拳をらくらくとイオはかわしていく。

なんとかかわしたのちにイオの右手によるアッパー・カットが決まつた。

だけど、これはかなり力を抜いている。

今までの経験上、イオは左利きである、なのに右手を出したのは相手を一撃で

ノックアウトしないためだ。

数えきれないほどの膝蹴りが相手の胃袋めがけて入った。

さらに、なんどもなんども相手の腹めがけて軽いパンチを繰り出している。

手加減しているのって、相手のためっていうより、自分の憂き晴らしのために相手をなぶりものにしていくとしか考えられない。

初めてイオを怖いと思った。

今まで、イオに自分の身体を取られるのではないかといつ不安はあった。

けど、決してイオに恐怖は感じなかった。

あいつが、わけもなく人を傷つけるようなやつではないって感じていたから。

今までにも幾度となく不良や悪人？ をやつつけしてきた。

でも、今日はいつもと違つた。

普段は悪に対する戒め、相手を改心させようと気持ちはだけだつた。

なのに今は、暴力という行為を楽しんでいるようだ。

わたしは自分の身体だとうのにその残酷な行動を止めることが

できない。

わたし自体は運動音痴で喧嘩などしたこともない、そんなわたしの身体を使って普段喧嘩慣れしているであらう相手を、簡単に倒してしまつのである。

それほど力のあるイオの仲間たちが、もじこに地球上に沢山やつて来たとしたら?

もしかしたら、イオの星の住人たちが、今現在、地球上に向かっているかも知れない。

思い浮かべただけでもぞつとする。

ふとわたしは思った、イオに勝つて欲しくないって。

こんな不良たちを勝たせるのは悔しいけど、でも、人間である彼らには負けないで欲しかった。

イオなんか負けちまえ!

三人目を殴りことしたイオの手が、ふと、止まった。

「こりやわつ!」

相手の拳が、イオの腹にめり込んだ。

三人のうちでも一番弱そうだったが、相手も必死である。かなり効いた。

イオの腹と言つても、彼が今は支配しているだけで本當はわたしの身体なのである。

この後、イオはなんの抵抗もしなかった。

ただ、彼らのなすがままにされていた。でも、女の子にとって大事な顔が殴られそうになる時だけは避けてくれた。

イオたちみたいに整った顔じゃないけど、やっぱり傷がついたらいやだもんね。

少しばは氣使つてくれてるんだ、イオのやつ。

彼らがいなくなつた後、わたしは地面に仰向けに大の字になつて転がつた。

もう、すっかり暗くなつた空には星が輝き始めていた。

なんか気持ちいい。

大地に寝転んで、土の香りをかぎながら星を見るなんて、なかなかないもんね。

わたしの身体は、わたしの意志のもとに戻つてきていた。

なのに、痛みはまったくなかつた。

きつとイオが痛みの全部を背負つてくれているのだひつ。

「なぜわざと負けたの？」

な・ぜ。

聞くまでのことはない、わたしの負けてしまえと思ひ心で彼は反応したのだ。

いつもは饒舌なイオが、今は黙り込んでいる。

イオの気持ちも伝わつてこない。

まるで彼がいなくなってしまったのかと勘違いするぐらい。

ただ、感覚の無くなつた身体だけが、いまだにわたしの中に彼が存在していることの証だつた。

なんだかそれつて、変な氣もするが。

喧嘩をしたばかりの疲れも無いのに、起き上がるこどが出来なかつた。

さつきまで、ジイー・ジイーと耳障りな音を立てて不規則に点滅していた街灯が切れて、真っ暗になつた。

暗くなつた空には、いつもより少しだけ増えた星が瞬いていた。

『ねえ、イオのいた星つてどれ?』

『見えないよ

『そんなに遠いんだ』

まあ、都会で見える星の数なんてたかが知れてるけどね。

でも、なんか、改めて宇宙の広さを感じた。

そうだよね、今までイオみたいな宇宙人が実在するなんて想像してもみなかつた。

いたら面白いな、つてくらいで。

だけど、宇宙って広いんだよね、どんな生物がいたっておかしくない。

『レナと俺は、家同士が決めた許婚』

『えつ、でも、九条先生はレナとアールは恋人同士だつて』

『そう、だからそのことがばれて、アールは地球へ追放されたんだ』

『レナにはお咎めがなかつたの?』

『アールの身分は俺たちより低いから、罪を問われたのはアールだけ。だけど、それって、なんか納得できなくて俺はレナを連れてアールを捜しに来たんだ』

『科学がいくら進歩していても、身分制度はずいぶん古めかしいのね』

『そういう地球人こそ』

確かにそうかも、民主主義つていいながら、いろんな特権階級がいたりして。

『ちょっとまってよ、罪人のアールが地球へ追放されたってことは、地球は流刑地つてこと? そうか、最近日本の治安が悪くなつたのは、イオの星の罪人たちが来ているからか』

『それは、違うと思うけど』

『どうして？ だって、悪い宇宙人がいっぱい来てるんでしょ』

『いっぱいほどは、それに極悪人は地球に来てないし……アルだって悪いやつじゃない。 ただ、いけ好かないやつだけビ』

そういうながらも、なんだかイオが一人を大切に思つてゐる氣持ちが、湧き水のように清らかにわたしの体いっぱいに溢れ出てきていた。

こんなにだれかに思つてもらえるなんて、ちよっぴり一人がうらやましかつた。

今まで人とは適度な間隔を持つて付き合つてきただけれど、なんだかイオたちみたいなのもいいかなつて。

その時、沙羅と良の顔が浮かんで思わず頭を振つてしまつた。

空には、パラパラと散らばつた星が輝いていた。

昨日のことがあったから、朝っぱらから担任の九条先生に会つのはきつい。

その上、一時限目から九条先生の科学である。

「どうしたやつたの？ 朝から暗い顔しちゃつて」

「わっ！」

田の前に突如現れた一つ田の沙羅の顔に驚いた。

人の顔つて近づきすぎると一つ田に見えるんだ。

なんだか妙なことに感心して、不覚にも沙羅の顔をしげしげと見詰めてしまった。

「さやつー、恥ずかしい、そんなに見詰めちやいやあーん 」

沙羅が両手の拳を軽く握りあごに当てるに身体を左右に振りながら、語尾上がりのぶつりっ子の声を上げた。 ああ、いつものことだが。

その横では、良がわたしを睨みつけている。

「先輩とは上手くいってるの？」

良の言葉に反応するように、昨日の保健室の光景が脳裏にまざま

ぞと騒つた。

「あの様子じや、つまくこつてないね」

良の言葉が、グサッと心を刺した。

それって、自分の心だけではなによつた気がある。 イオの心も一緒に串刺しになつちゃつたて感じ。

けをからイオは一言もしゃべらない。

だけど、わたしの中にひとだけはわかる。

だつて、伝わつてくるのだ、なんだかわからぬいけどもやもやしたようないらいらしたよつた変な感じ。

なんか、わたしの心もあこいつの心に同調してしまつたようだ。

「まあ、あたしはひとつに転んだつていいんだけど。 もし万が一、伊緒乃が剣道部とつまくこちまえば、それはそれで厄介払いが出来ていいしね。 でも、まあ、それは、日本沈没よりありえねえけど

地球温暖化で断然日本沈没のほうが可能性高くなつたかも。

「だめ！ 良ちゃん、伊緒乃ちゃんを焼きつけるよつたこといつちや。 伊緒乃ちゃんの性格わかつてゐるでしょ。 もし本当に先輩と仲良くなつちやつたらどうするのよ。 そんなことになつたら、沙羅もう学校に来ないから」

「だれかな？ 学校に来ないなんて悲しいこと、こつてゐるのは？」

いま一番会いたくない九条先生が白衣を着て、沙羅の後ろに立っていた。

「はーい！ 沙羅で～す！」

勢いよく挙げた沙羅の手が先生の胸を直撃した。なんとなく、沙羅の行為には悪意があつたような気がするのは、わたしの思い過ごしだらうか？

先生は、沙羅の一撃に顔をゆがめたが、すぐに言葉を続けた。

「どうしてかな？」

先生は極上の笑みを浮かべて沙羅の顔を覗き込んだ。

ほかの人だつたら、この微笑一つで失神してしまつかもしれない。

案の定、クラスの大半がうつとりとした目つきで見つめている。

「伊緒乃ちゃんに恋人ができたらどうす

「浅田さんにはそういう人がいるのですか？」

「いません！」

わたしはあわてて否定した。

「ところどりですよ、末永さん。^{すえなが}安心して学校へきてくださいね」

「でもね、九条先生。伊緒乃ちゃんは、ひろ……」

「わー！ 先生、授業でしょ、授業」

「そうですね。ただ、一つ忠告しておきます。広瀬君はやめて
おいたほうがいいですよ」

耳元でささやくと、意味ありげに口元を歪め、わたしに向かって
ワインクをした。

悪寒とともに女子たちの射るような視線にわたしは身震いした。

先輩の中にはレナがいて、アールの九条先生とは恋人同士。

といふことは。

でも、先輩は先輩で。

うえへん、もへ、よくわかんないよー どうすればいいのよ、わ
たし？

わたしのファーストキスをかける、なんていうくだらない賭けをしてから七日が経とうとしている。

剣道部の部活を観にいかなくなつて六日。

「わ～い！今日はジャンボ苺パフェが食べられる！」

沙羅が教室の床が抜けるのではないかと思つぽひ続けざまにジャンプをしながら騒いでいる。

良はその様子を眺めながらボソッとわたしにつぶやいた。

「本当にそれでいいのかよ」

「いいも悪いも、ありえないし」

「ありえないとかそういう問題じゃなくつて、伊繙乃自身の気持ちの問題だよ」

「気持ちの問題って？」

「好きなんだる、剣道部のこと」

わたしが先輩を好き？

「わたしは……」

あれはただイオが毎日見に行っていたのを、一人が勘違いしただけ、好きとか嫌いとかではなくって。

「剣道部にアタックしたのかよ」

「もひ、良ちやん、そんなことこわいの」

「沙羅はそんないいかげんな伊緒乃でいいのかよ。あたいも、伊緒乃の単純でしかも勢いだけでなんでも乗り越えちゃうとい、ゆう」と思つよ」

「沙羅も伊緒乃ちゃんのやうにっこ好きー。」

「そう仕向けているのはだれよ。本当のわたしぶ、めんべいくさい」とには田を瞑つて生きてきたのだ。

「そりや、自分でも単純だなつて思う。賭けのことだつて勢いで受けちゃつて。でも、自分で自分がわからなくなることだつてあるんだよ。広瀬先輩のことだつて、かつこいいなとは思つけど本当に好きなのかわからんないし。ただ、先輩とのキスを賭けにするなんて先輩に悪くつて、失礼だよなつて」

「それで、最近部活を観に来なかつたんだ」

振り向くといつからそこについたのか広瀬先輩が立つていた。

「で、俺のキスの価値つてどの位?」

先輩つて、こんな言い方する人だったのだろうか?

まあ、トイレの時も冗談はいつていたけれど。

「ジャンボ苺パフェ！」

沙羅が元気に返事をする。

この、能天氣娘が！

「ふう〜ん、そんなもんなんだ」

なんだか、先輩の雰囲気が違つ。

『まずい、同化してきたのかな？ それとも』

イオが深刻な声を出す。

『同化つてなに？』

わたしがイオとテレパシーで会話をしていたその瞬間、頬に仄かに暖かいものがかすめた。

なつ、なに、なに今の？

「こんなものでいい？」

先輩が聞くと、良は急いで答える。

「はい、そんなもんで」

沙羅は直立のまま硬直している。

「じゃ、お取り込み中のようなので、これで失礼」

「待てよ」

イオが話しに加わる。

先輩が振り向く。

「思い出したんだろ」

イオの言葉に先輩がわたしの耳元で囁く。

「大切なところ見られたってこと」

イオの平手が先輩の頬を目指した。

先輩がイオの左手をつかむ。

「いつもとき、運動神経の良い器つて便利ね」

とつれに出てわたしの右手は、見事先輩の頬に当たった。

「器なんて言わないでよ、先輩は人間なんだから」

沙羅達に聞こえないように、出て行こうとする先輩の後姿に小声で言った。

「イオはレナさんのこと、すごく大切に思っているんだよ」

「伊緒乃ちゃんを怒らすなんて、ぜったい、沙羅、絶対許さない！」

しばらく経つても、さつきの出来事が理解できずに、ただ微かに
残る頬の暖かい感触を手のひらで覆っていた。

第六話・ふたりつきり 1

沙羅たちと校門を出ようとしたわたしの目に、先輩が映った。

「ちょっと聞きたい」とあるんだけど

先輩の言葉に反応し、沙羅は上目遣いに先輩を睨みつける。

普段は愛くるしいまん丸な眼なのに、睨みつける時は普通の人以上に凄みがある。

「あのねえ！」

なにかいいかけた沙羅を、良は抱え上げた。

沙羅は懸命に足をバタつかせ抵抗を試みたが、良の力には勝てるはずも無くこの場を去つていった。

「少しいいかな？」

息苦しい。

大きく深呼吸をひとつすると、わたしは先輩の前を通り過ぎた。

「待てよー。」

早歩きのわたしの後を先輩はついてくる。

なんだ深呼吸しても早くなつたわたしの心臓の動きは元に戻らな

い。

「待てつたら！」

先輩がわたしの腕をつかむ。

「レナって……」

わたしは横に首を振った。

「きみは知っている、そうだろ！」

大声を出してしまってから先輩は、周りの田を意識して小さな声になつた。

「少しだけ話をしたい」

まるで、さつきの出来事はなかつたかのよつた態度の先輩が少し気になつて、わたしはゆつくつうなずいた。

たぶん今は、レナではなく本当の先輩なのだ。

先輩と小さな児童公園に入った。

砂場とブランコがあるだけの小さな公園。

誰もいない。

斜めになつた夕日がオレンジ色にあたりを染めた。

「レナつてなに？」

先輩の真剣な顔をわたしは正面から見ることが出来なかつた。

「だつて、きみがいつたんだろー！」

黙つているわたしに少し語氣を荒げた。

先輩はわたしの言葉を聞いていたの？

じゃあ……。

「先輩、せつしきのは……」

「せつしき？」

「覚えていないんですか？」

やつぱりあのキスはレナだつたんだ。

先輩は田線を足元に落とすと黙つてしまつた。

もしかして、先輩はわたしと違つて相手が身体を動かしている時は、

記憶が無いのかもしれない。

それとも、イオがつぶやいた同化。

『同化つてなに?』

イオにたずねた。

『もともと、一つの身体には一つの魂しか入れない。大抵は地球人の魂を追い出すか殺してから入り込むのだけれど、でも別の身体に入つたものは、少なからず肉体に刷り込まれた記憶の影響を受ける』

『ふうん。じゃあ、イオもわたしの影響を受けているつてこと? そつはみえないけど』

『受けてないから』

『なんで』

『たまにいるんだよ、ほかの魂が入り込んで平氣なおまえみたいなやつ』

『どうして?』

『鈍いからじゃないの』

『ひどい-。』

一呼吸おいてイオは続けた。

『レナは記憶をなくしたまま、無意識のうちに彼の身体に同居してしまった』

『でも、だからどうなの？ イオだつてわたしの身体に居候しているじゃない』

『普通、ある一定時間をすぎると精神力の強い方に吸収されてしまうか、同化してしまつ。 大抵地球人の方が未成熟な分、吸収されてしまう確率が高い。』

吸収された魂は肉体が滅びるまで暗い檻の中つて感じかな。でも、レナの場合は記憶をなくしていたからかなり広瀬の影響を受けていふと思つ。だから、同化してしまつ可能性が強い』

『じゃあ、同化するとどうなつちやうの？』

『化学反応と同じでまつたく別の人格になつてしまつ』

それじゃ、どうにこしても先輩は先輩じゃなくなつやうのー？

そんないやだ！

「……呼ぶときがあるんだ」

やつと聞き取れるぐらいの先輩の声。

「えつ？」

「九条先生もレナつて」

先輩が不安げな顔を向ける。

「そうだ、けがはもういいんですか？」

「ああ、あれ、もうなんともない。九条先生が大騒ぎをしただけ
だから」

先輩はわたしを安心させるように、右肩を回して見せた。

ほんの少し痛そうに顔をゆがめたがすぐに笑顔を見せた。

「なつ」

「九条先生つて、なんか、変ですよね」

あの保健室の事を思い出して、わたしは口走ってしまった。

「そりやか？ いい先生だと思つけど。 部活も熱心だし、優しく
つて」

『あいつは昔からそういうやつだ。上り面だけは』
イオが心の中でぼそつとつぶやいた。

「まあ、見た目が、あそこまで完璧だと少し嫌味かな。そのうえ
受け答えもそつが無い」

先輩はほんのちょっと笑った。

「完璧な人は浅田さんの好みではないってこと」

「うーん、そうかな。だつて不完全なほうが人間味あるでしょ。
完全だつたらそれ以上になれないわけで、そんなのおもしろくない
もの。あつ、でも九条先生の見た目は完璧だけど人間性とかはどうかわ
らないけど」

「そうだね」

わたしたちは顔を見合させて笑った。

ふと、あの時かすめた頬の感触を思い出しても、わたしは目をそら
した。

「キャーー！」

突然、女の叫び声と犬の激しく吠えるのが聞こえてくる。

公園の周りにある臘月の植え込みから、一人飛び出してきた。

小さい方の人影がわたしに抱きつく。

かなり大きい人影は、わたしにしがみついた人物をはがそうとする。

「沙羅に良！」

「伊緒乃ちゃん、沙羅こわいよ～」

「は・な・れろーー！」

「なんで、沙羅と良がいるのよ」

「心配だつたんだもん、伊緒乃ちゃんのこと」

「なんで？」

「だつて、先輩があんなことする人だつたなんて知らなかつたんだもん。

知つてたらあんな賭けなんかしなかつたもん。だから、一人つきりになつたら伊緒乃ちゃんの貞操の危機だと思つて」

「飛躍し過ぎだつてばあー！」

まったく、なに考へてゐるんだ、沙羅つてば。

沙羅はわたしにしがみついたまま先輩を睨む。

せつと結んだ口元に膨らんだまま、淵みのある田付さんの割にはなんとなくこのひのきの顔がほほんじやつのは童顔である沙羅の特権だ。

「浅田さんには聞きたいことがあつただけで……なにも……」

先輩には沙羅の凄みが効いたようで、ちょっとおどおどしてくる。

「あんたなんかね、女の敵よー。プレイボーイー。おんなたらー。すけーましー。その上、九条先生とあんなことさせないといふことはござりません。やつてや。この買女めー。わたしの伊緒乃ちゃんこれ以上手を出したら承知しないんだからー！」

「や、沙羅、違つただつてば、やつるのは先輩じや……それこ、ば、買女つて、日本語間違つてゐるよ」

先輩は疑問符を撒き散らしたよつた顔をして尋ねる。

「九条先生とつて？」

「えつ、えつー？ やつこえば、あの口、沙羅と良もあの場所にいたのー？」

「伊緒乃ちゃんにはショックが大きこと思つて黙つてこました。だつて、あんなこと、

伊緒乃ちゃんがかわいやすぎて沙羅には申し上がるひとでなかいでござんなですわ」

神妙な？ しゃべり方をしている割には、妙に眼が輝いているように見えるのはわたしの気のせい？

「いつてもいいの？ 先輩」

「いつてもいいも悪いも、俺には」

「しらばっくれるんならいつちやうもんね。 一週間前、広瀬先輩が怪我をした時、保健室での一人がしてたとこ見ちやつたんだから、ねえ、良ちゃん」

わたしと眼が合つと、良はうなづいた。

「二人がベッドで抱き合つてキスしていると」

「そ、そんなことあるわけないだろー。」

「そんなことあるもんねー。 広瀬先輩と九条先生は××の関係だもんねー。 もんねー。」

きやつ、こやらしこ

「沙羅と良、今日は悪いけどこれで帰つてくれない。 先輩と二人だけで話がしたいから」

これはわたしではなくイオの言葉だ。

「はーーー！ 別れ話はきちんととしたほうがいいもんね」

「別れ話もなにも付きあつてないつてー。 先輩に悪いでしょ」

明らかに傍田にも動搖しているのがばれればな気がして顔が熱くなつた。

「はい、はい、行こうつむちゃん」

一人の去つていく姿を引き止めたい思いを隠して見送つた。

そのまま先輩と二人つきりになるのが、非常に気まずい。

ふと見上げると、赤い大きな用が空にあつた。

第六話・ふたりつき 2（後書き）

残りも後わずかになりました。

終わりのほうがこんなのでいいのかな？ せっかく読んでください
つている方に、殴られるんじゃないかと不安ですが、何とか書き上
げます。

最後までよろしくお付き合いくださこませ。

話がしたいといつておきながら、イオは一言もしゃべらない。

静かな時間が流れしていく。

でも、わたしの心は穏やかじゃない。

「ねえ、広瀬先輩、ブランコに乗りませんか?」

小さなブランコに座った。

子供用に出来ているブランコは、大人に成りかかったわたしにはちょっと窮屈だった。

わたしはブランコの上に立ち上がり、一歩始めた。

「わあ！ ひさしぶり！ 子供の頃つて、こいだまんま飛び降りたりしました？」

先輩はブランコの周りの柵にもたれていた。

「子供の頃つて無茶してたんですね。今は怖くつて飛び降りるなんてできないです」

ブランコを止めて降りると、ちょうど先輩の横顔を見た。

先輩から少し離れた柵の上の反対側から腰を掛けた。

『ねえ、イオ、話すことがあるんじゃないの？』

イオの返事は返つてこない。

その代わりに、なんだかわからないもやもやしたものが伝わってくる。

なんか綿^{まき}ぼこいつを喉に詰まらせているようなそんな感じだった。
「田舎へ行つた時、いとこに星空を見に連れていてもらつたんです。
すゞく沢山の星が輝いていて、あんな星の数を見ていたら宇宙人
がいてもおかしくないだうなつて思えて。あの、先輩は宇宙人
を信じますか？」

唐突で変な質問に先輩は困つたように眉をひそめた。

でも、ここでいわなくつちや。今いわないで、このまま先輩と
レナが同化しちゃつたらいやだ。

「あの、わたしの中に宇宙人がいるんです

わつ、わつ、わつ、唐突すぎるんじゃない？

自分でいつておきながら、パニックつた。

で、でも、いわなくつちや。

こんな話、レナの記憶がない先輩には、ばかげた話にしか聞こえ
ないだろうけど。

「先輩の中にもレナっていう宇宙人がいて、レナと九条先生が恋人同士で、だから、だから、だから、先輩悪くなくって」

吐ききつて苦しくなった呼吸を整えた。

「だから」

「俺、時々記憶が無くなる時があるんだ。でも、それが宇宙人のせいだとは思ってないから。浅田さんが俺を気遣ってくれる気持ちはうれしいけれど」

「本当なんです。冗談じゃないです」

「ありがと」

先輩は歩きはじめた。

『ねえイオ、なんとかしてよ。これじゃ、先輩傷ついたまま帰っちゃうよ』

『レナ』

イオがテレパシーを送ると先輩は立ち止まつた。

『俺だよ、イオだ』

先輩は振り向いた。

「イオ?」

「 もう思って出しでくれているだろ、俺の！」と

「 知らない」

「 そんなはずはない、記憶は戻っているはずだ」

「 もうね、イオはなんでも知ってる」

「 その体に入つて、もう一年以上経つんだろ。 そのまま、そこそこ
いたらそこそくと同化してしまつ」

「 そうね、それもいいかも」

「 なに」いつてるんだよ、アールは見つかつたんだし……。 同化し
てしまつたら、そいつが死ぬまで、もとに戻れなくてしまつ！」

「 思い出さない方がよかつた。 あなたとの！」と

「 そうだな、初めから俺たち許婚でもなんでもなければ

「 ふたりして、イオを裏切らなくつて済んだ」

「 もうだ、レナとアールは堂々と付き合えた」

イオには先輩を通して、彼女の姿が映つている。

違つよイオ、もうじやない。 レナの気持ちをイオはわかつてい
ない。

「 イオ、あなたはいつも正しい、ハートをさ

この広い宇宙にたつた一人取り残されたように淋しげな微笑を残して、彼女は去つていった。

レナは……

虚しかだけが身体いっぱいに溢れそつになつた。

わたしは空を見上げた。

薄明るい空には申し訳程度にともつた星が揺れていた。

つぎの日の放課後、わたしは悩みに悩み抜いてやつぱり輩の「」とが気になり体育館へ行つてみた。

もうすでに稽古は終わつていた。

いつものように先輩は雑巾掛けをしている。

それを見守るように九条先生が隅に立つている。

先生がバケツに手をかけた時、先輩はそれをもぎ取つた。

口論になつてゐるようだけれど、体育館の外にいるわたしのところまでは聞こえてくるわけもない。

でも、イオには聞こえているはずだ。 だつて、彼にはテレパシーがあるのだから。

二人の会話を聞いてみたいような、やつぱり聞くのが怖いような、複雑な気分。

『二人が何を話しているのか、わたしにも教えてよ』

盗み聞きは、気がとがめたが背に腹は変えられない。

やつぱ、先輩、レナにアールのことが気になるんだもん。

もう部活は終わったのですから、先生はお帰りになつて頂いて

結構です。

とつじょ、ぴしゃりと叩きつけたような先輩の声が聞こえてくる。
といつても、これはイオの能力を通して聞こえてくるのだから声
ではないのだけれど。

先輩は九条先生を無視するように雑巾をバケツで洗い始めた。

先生は先輩の腕をつかむと引つ張つて立ち上がらせた。

放してください。

『レナ』

今のは先生のテレパシーだ。しゃべってはいない。

『出でおいでレナ』

手を外そともがいていた先輩の動きが止まった。

それと同時に、力が抜けたように雑巾が床に落ちた。

きらきらと水滴が舞つた。

先生が先輩を抱き寄せる。

「わあーー！」

反射的にわたしは大声を上げてしまった。

「だめ！ その身体、先輩のものなんだから！」

「そんな所で立ち聞きなどしていないで、入つて来たらどうですか」

叫んでいるわけでもない声が、すぐ側に感じられる。

その声に引き寄せられるように、イオは体育館の中へはいっていった。

「お久しぶりですね、イオ」

「やあ、アール・D・20874・ベルスクス」

「その名前で呼ばれるのも、グラン星を出てからですか、地球で
いつ五年になりますか。 皆さんお変わりありませんか？」

宇宙人達のありきたりな挨拶に、なんだか面食らった。

これって、地球人と変わらないんじゃないの？

あまりに当たり前すぎて、かえつて違和感を覚える。

『浅田さん、それは、私達が地球人に似ているのではなく、地球人
がグラン星人に似ているのですよ』

微笑みかける先生の口は動いてはいなかつた。

地球人がグラン星人に似ているというの……

そういうえば、初めてイオと会ったとき、イオも同じDNAとかいつていたよね、確か。

ていうことは、地球人とグラン星人は同じなんだ。

な～んだあ～。

『同じではないよ。グラン星人が自分達の移住のために作った惑星の住民がさらに、自分達の移民のために作ったのが地球人。つまり地球人は、グラン星人のコピーのコピーってわけだ』

さらりとイオは口(?)にする。

「コピーのコピー？」

「それで、だいぶ粗悪なのが出来てきていますがね。この身体もやつと見つけて、これまでにするのが大変でしたよ。それにしても、イオはまたユニークな器を見つけましたね」

「ユニークな器つて、先生、それですっごく失礼じゃないですか！」

「私としては最上級の褒め言葉のつもりですけどね。特異体質のイオは、普通の人間の身体だと一日と立たないうちに同化しますから。それが起こらないというのは、最高の器ですよ」

「器、器つてね、人を丼か茶碗みたいにいつといて、あなた達の星ではどうか知らないけど地球ではなんにも褒め言葉になつていない！」

「ひとつあなたに忠告してあげます。あなたの回りでは大勢あな

たを狙つていますよ、器としてですけど

「どうこう」と?

先生は微笑んだ。

「いつつ時つて、整つた顔立ちほど」の笑顔がぞつとする。

「私も浅田さん田端でここへやつて来たのです。 あそこのおふたりさんもそのようですねけれど」

先生の田線を追つて振り返ると、扉の影から沙羅と良が顔を出した。

「えつ、ばれちゃつてたの? うまく地球人に成りすましたと思つていたのに、沙羅く・や・し・い・!」

「えつ、えつ、どうこうと?」

『ねつこう』

『そつこう』とつて、沙羅も宇宙人なの? えつ、えーつ! イオも知つてたの!?

「でもね、沙羅、伊緒乃ちゃん気に入つたから乗つ取るのやめにしたの。 からかつてるほうがおもしろいもんね」

「つ、わたしはこの二人の宇宙人からかわれていたのだ。

『今頃、気づいたのか。 どんなさいやつ』

『あなたにからかわれているのだけは、よ～くわかつてゐるわよ。』

第七話・一件落着してなごや 1（後書き）

いよいよ残すところあと二話になりました。（たぶん）最後まで見捨てずにお付き合っていただけたらとおもいます。

第八話：一件落着しないぞ 2（前書き）

あと2話でたぶん終わります、つていっておきながらそのまま2ヶ月間ほつたらかしてしまいました。

待つていただいた奇特なお方、今まで待たせて「めんなさい。やつと終わらせます！ 2話には分けずに今日が最終話です。

「私も浅田さん田当てでここへやつて来たのですが、イオが先に入つていたのは大きな誤算でした」

「おまえに伊緒乃はやらねえ！」

わたしの身体でイオが言つ。

「ちよつとまつた！！」

突然わたしは大声を上げてしまった。

「問題はわたしのことじやなくつて、レナさんのことじよ！」

「そうだ、そうだ！」

沙羅が面白半分に口を出す。

「レナさんが記憶喪失になつたのつて事故のせいだけじやないんじやないの？」

「そうだ、そうだ！」

「イオとアールのせいじやないの？ だいたい、イオにはこの女心といつものが全然わかつてない！」

「そうですね」

アールが他人事のように言つ。

「当事者のイオより、浅田さんのほうがよくわかつていらっしゃるよ
うで」

「わつだ！ 決闘だ！ 一人の女性を取り合つには決闘だ！」

沙羅がはしゃぐ。

決闘だなんていつたいつの時代の話をしているんだ、沙羅つたら。

うへん、だけど……

青春ドラマによくあるよな、殴り合いのけんかしたあと一人が仲良
くなつちやうなんて。

はあ？ そりいえば今の時代に青春ドラマなんて存在するのか？

こんな時に、なに考へてんだ、そんなのどうでもいい。

三人がもとの仲のよい幼馴染に戻つてくれればなんだつて。

わへ、こりなりや やけくそだ！

「一人でとここん戦えば！ わだかまつたままするするしてこるよ
りすつきりするかもしない」

沙羅の意見に賛成したものの、宇宙人の決闘とはどんなものなのか

わからない。

それにやけになつて言つては見たものの、そんなことでイオとアールのこじれた問題が解決するとも思えないが……

といつよりも、一番肝心なのはレナの気持ちじゃないのかな？

「そうかもしれないですね。では、行きますよ、イオ」

えつ、なに？ 納得しちゃつたの？

「望むところだ！」

イオとアールの視線がぶつかり合いバシバシ火花が散つてゐる感じ。

熱血スポーツ根アーメだつたら絶対瞳の中に炎が燃えてる。

えー！ どうなつちやうの！？

その時、体育館内がカーレース場に変わつた。

小さな車が一台。

？？？？？

スタートの合図とともに走り出した。

なにこれ？

普通、戦いといえば殴り合ひの喧嘩なんじゃないの？

そして、一人ともぼんぼりになつたあとで仲直りしちゃうんじゃないの？

それが、ドラマの常識でしょう。

先輩がくすりと笑う。

「変わらないわね、一人とも」

『えつ？』

『子供の頃から一人ともこれが好きなのよ』

『レナさん？』

『始まったわ』

青い車が赤い車を追い抜くと、赤い車はスピードをあげ青い車の横につけと体当たりを始めた。

『イオの車が』

『赤い方。負けず嫌いだもんね、あいつ』

『そう、伊緒乃ちゃんはイオのことわかつているのね』

『まあ、一心同体ですから』

目の前では暴走した一台の車のバトルが展開されていたはずだが、いつの間にか車が怪獣に変わっている。しかも、次第に巨大化していく。

『なに、これ？ イオだけならばいざ知らず、先生の性格もこんななの？』

宇宙人の決闘つてすつごくばかげていない？

『イオってね、超エリート家系の跡取なのよ』

『うつそーー』

『様々な能力も長けているしね』

『信じらんない。アールの方がエリートだつていうならわかるけ

ど』

人は見かけによらない……いや、性格によらない……まあ、とにかく今のイオからは想像がつかない。

バトルは天候戦に変わっていた。

大雨や雷、地震や吹雪、炎に稻妻！

あめあられ % & ! !

もう体育館内は上や下への大騒ぎ、ひっちゃかめっちゃかの右往左往、じっちゃじっちゃになっていた。

これって、現実に起こっているわけじゃなくって、幻想を見せてくるだけらしいのだけど。

『わあーー!』

肉体的に結構きつい。

熱いし、寒いし、目はチカチカ、しんどいしー

『あつ！ あのー、レナさんてアールを追いかけてきたっていうけど、本当はイオの事が……わあーー!』

突然雪崩がわたしに襲い掛かってきた。

肉体のわたしではなく、精神の世界でのわたしに」だ。

今繰り広げられているイオとアールのバトルは、現実ではない、幻想の世界だ。

そう、現実ではないと思い込もうとしても怖さが襲ってきた。

「浅田セーん！」

先輩の声とともに羽毛に包まれたかと思つたら、現実に引き戻されていた。

気が付くと倒れているわたしの上に覆い被さるように先輩が倒れていた。

「せ、先輩」

先輩は床につけた手を伸ばすと、わたしから身体を離した。

「大丈夫だった？」

「うん。先輩にも見えていたんですね、あの景色」

なんだか、こんな体勢のまま話しているのもなんだか恥ずかしくつて、起き上がろうとしたが身体がなんだかコンクリートで固められてしまつたように重くて動かない。

「伊緒乃……」

先輩の息が首筋にかかる。

ちょっと待つて！ 心の準備が、
つてそういう問題じゃないって。

先輩の顔が上からわたしを見つめる。

「やめて、レナ！」

これって、先輩とレナが同化し始めているって事？

先輩の顔が目の前に迫ってきた時、突然大声が響き渡った。
いや、声ではなくレナのテレパシーだ。

『じゃましないでよー。』

『どうこいつもりだよー。』

イオとレナの言い争い声。

それと同時に先輩が飛びのく。

『わたしは彼と同化する事に決めたのだから』

『なにバカなこと』といつているんだよ

『バカなのはイオの方よ。 鈍感なんだから』

ちょっと、ちょっと待つて、これってわたしの中で一人は言い争つ

ているわけ？

『彼の身体に戻るのだから放してよ。これからは彼になるのだから』

『それで、どうするんだよ。そんな事をしたら、彼が死ぬまでレナ自身に戻る事は出来ないんだぞ。レナは家を捨ててまでアールを探しに来たんだろ』

「きみは本当にバカだな」

いつもの『』とく人事のよつに冷静な九条先生。

「ああ、バカだよ。許婚を親友だと信じていたおまえに取られたのだからな」

「それがバカだというのです」

「なんだと！ まだやる気か」

「レナはきみの事が好きなのですよ」

わたしもそう思う。

「なのにイオは家同士が勝手に決めたことだからと反発していたでしょ。レナは淋しかったのですよ。だから、きみに焼きもちを焼かせようとして。そして今、広瀬君の身体に戻ろうとしているのは、イオの好きになつた人を奪つてやるのうと思う嫉妬心と、それは裏腹に他人の身体を通してでも君と結ばれたいと思う女心のいじらしさ」

「なに勝手に詮索してこるのはー。」

わたしの身体を通してレナがしゃべった。

あ、あの、今やうひと流れかけたけど、結ばれるって？

『イオの好きな人って、レナじゃないの？』

『浅田さんも自分のことになると、うとうとうで』

『モジがかわいいのよね～』

『な、なによ、沙羅まで』

あの日、急転直下のひとばたから数日立った日。

『前に、風呂で洋ナシなんて言つてじめんな

あいも変わらず、イオはわたしの身体に居候している。

『いいよ、別に気にしないから』

「伊緒乃、今日は部活がないから一緒に帰ろう」

「せ、先輩！」

レナは今も広瀬先輩の中にいる。

先輩がわたしの手をつかむ。

いや、これはきっとレナだ、先輩はこんなことはしない。

すぐに先輩は慌てて手を放す。

今先輩に戻ったのだろう。

わたしてきにはもう少し、手をつないでいたかつたんだけど。

『あ、あの、なかなかよかつた』

イオが言つた時、レナが唐突に話題に割り込んだ。

『何がよかつたの！』

『わっ！』

先輩と同化しないように、時々レナは同化のしにくいわたしの身体に勝手に入りこんでくる。

その度にレナとイオは大喧嘩をする。

わたしとしては、まつたく大迷惑である。

「伊緒乃ちゃんは沙羅と一緒に帰るの」

わたしの身体に沙羅がしがみ付く。

童顔のくせに大きな胸がわたしの胸中でふよんふよんとじ躍る。

「離れーーー！」

良はいつもの「」とわたしを沙羅から引き離そうとする。

だがイオは沙羅の胸の感触を楽しんでいる。

これではレナが焼きもちを焼くのも無理からぬ事。

「ああ、ここにいたのか広瀬くん、ちょっと部活の事で……ううん？ あつやうやう、浅田さんに用があったのです」

九条先生の魂胆も見え見えだ。

間違いなくレナに会いに来たのである。

それにも、ますます妙に絡まつたこの複雑な関係は、いったい

どんな関係といつだひつ?

第八話・一件落着しないぞ 2（後書き）

ふうー、終わりました。

第一話で出てきた大友くん、本当は名前を出そうかどうか迷つたのですが、出したのに出番はあそこで終わってしまいました。本当は話にもつと絡ませたかったのですが、あきらめました。

最後までお付き合っていただきありがとうございました。

お付き合いついでにコメントなどを頂けましたら、作者、小躍りして喜びますので。

よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9547c/>

不思議な関係

2010年10月14日14時31分発行